《研究ノート》

琉球語の継承について

狩俣恵一

⑴ 話し言葉と書き言葉

琉球語は、奄美語・国頭語（沖縄北部）・沖縄中央語（沖縄中南部）・宮古語・八重山語・与那国語に分かれている。また、八重山語を例に取るならば、歴史的には八重山士族が居住した登野城・大川・石垣・新川の四ヵ字の言葉が中心であったが、現実には竹富島・小浜島・黒島・鳩間島・波照間島・西表島などの言葉に分かれており、島々の言葉は通じ合わない。

また、琉球語には〈話し言葉〉だけでなく、〈書き言葉〉の〈琉球文〉があり、〈話し言葉〉だけの他府県の方言とは大きく異なっている。言い換えるならば、日本語では仮名文字中心の和歌集・物語・謡本・日記・公文書などの〈書き言葉〉の和文を共通の言葉として使用したが、琉球語でも仮名文字中心の〈琉球文〉が共通語であった。

例えば、〈話し言葉〉の東北方言と九州方言は通じ合わないが、東北人も九州人も源氏物語を読んで理解することができ、能の謡を聴いて楽しむことができた。同じく、琉球王国時代の八重山士族をはじめとする地方士族は、首里士族の言葉（話し言葉）を聞き分けることができなくても、書き言葉の〈琉球文〉で公文書を読み、筆談で通じ合うことができた。ある意味では、〈琉球文〉は琉球語圏内における真の共通語であったといえよう。

⑵ 琉球文について

琉球文は、和文を基にした仮名文字中心の漢字交じり文である。『おもろさうし』をはじめ、辞令書・琉歌・組踊本などが琉球文で書かれているが、「読み」が比較的明らかな琉球文は琉歌と唱え（組踊のセリフ）である。したがって、琉球語の継承には、琉歌集や組踊本を活用することが望ましいと考える。次は、「かぎやで風」の歌詞（琉球文・読み・訳）と音数である。

（琉球文）	（琉球文の読み）	（訳）
けふの　誇らしやや	キユヌ3　フクラシャヤ5	今日の 誇らしさは
なをにぎやなたてる	ナウニジャナ5　タティル3	何に 喩えられようか
つぼでをる花の	ツイブディウル5　ハナヌ3	蕾んでいる 花が
露きやたごと	ツィユチャ3　タグトゥ3	露を受け た如し

琉球文は、和文の文語表記にならって「けふの」と書くが、読みはキユヌである。ただし、話し言葉のウチナーグチ（沖縄口）では、チューヌと発音する。つまり、琉球文の読みとウチナーグチ（話し言葉）では、発音において異なる部分があるということである。また、「ほこらしやや」はフクラシャヤ、「なをにぎやな」はナウニジャナ、「つぼでをるはなの」はツィブディウルハナヌ、「つゆきやたごと」はツィユチャタグトゥなどのように和語を琉球語的に読む。ある意味では、和語の琉球語化ということもできよう。

琉歌は、８８８６形式であるが、８音はさらに5・3音か3・5音に分割され、６音は3・3音に分割される。琉歌の歌三線奏者に聞くと、「8音を4・4音に分割される歌詞は歌うのに苦労する」という。ちなみに、近世小唄調の７７７５音は、７（3・4音）、７（4・3音）、７（3・4音）、５音、に分割される。琉歌調（８８８６音）と近世小唄調（７７７５音）は音数こそ違うが、三味線及び三線の音曲を伴って歌われる。分割できる音数は、三線・三味線の演奏と関係するだろうか。

次は、「若衆特牛節」の歌詞（琉球文・読み・訳）と音数である。

（琉球文）	（琉球文の読み）	（訳）
常盤なる松の	トゥチワナル5　マツィヌ3	常磐なる 松の
変はることないさめ	カワルクトゥ5　ネサミ3	変わることは ない
いつも春来れば	イツィン3　ハルクリバ5	いつも 春来れば
色どまさる	イルドゥ3　マサル3	色ぞ まさる

〈参考〉ときはなる（5）　松のみどりも（7）　春来れば（5）

今ひとしほの（7）　色まさりけり（7）　（古今集24番歌、源宗于）

この琉歌は、参考として挙げた古今集24番歌を基にしたもので、琉歌には和歌の換骨奪胎が多数見られる。その要因は、琉球士族の多くが和歌を学び、それを基盤に琉歌を作ったことによるものであろう。また、「ないさめ」はネサミと読む。イルドゥのドゥは係助詞「ぞ」である。

「若衆特牛節」の若衆は「若衆踊り」を指し、特牛節（クティブシ）は節名（曲名）である。特牛は、琉球語でクティ、九州方言ではコテイ・コッテイであり、「立派な雄牛」のことである。しかし、右の「若衆特牛節」は、「春になると常盤の松が鮮やかに色づく」という内容であり、雄牛をほめたものではない。この節（曲）の元の歌詞は、「大西のこていや　なづち葉ど好きゆる　わした若者や　花ど好きゆる」（大西の立派な雄牛はなづち葉が好きであるが、私たち若者は遊女が好きである）と言われ、伊江島から出た歌（曲）と言われている。

次は、組踊「執心鐘入」の冒頭の琉歌である。その「金武ぶし」について検討する。

（琉球文）	（琉球文の読み）	（訳）
照るてだや　西に	ティルティダヤ5　ニシニ3	照る太陽は 西に
布だけに　なても	ヌヌダキニ5　ナティン3	布のように なっても
首里みやだいり　やてど	シュイメディ5　ヤティドゥ3	首里ご奉公 なので
ひちより　行きゆる	ヒチュイ3　イチュル3	一人 行く

「てだ」はティダと読み、「太陽」の意。太陽が落ちる方向は琉球語ではイリ（入り）であるが、右の歌は琉球語のイリ（入

り）ではなく、和語の西（にし）となっている。また、ダキニは「〜のように」の意。「みやだいり」はメデイと読み、「ご奉公」の意。ヤティドゥは「〜なので」の意の接続助詞。「ひちより」はヒチュイと読み、「一人」の意。「行きゆる」はイチュルと読み、「行く」「行くところ」の意。

中城若松は「金武節」で登場し、〈唱え〉と言われる次のセリフを述べる。ちなみに、唱えは、若衆・女性・成人男性・老人・間の者（マルムン、道化的な役）では、発声や抑揚が異なっている。また、それらの唱えは８８８６音であり、琉歌調と同じく、５・３音、３・５音、３・３音、の音数に分割される。

（琉球文）	（琉球文の読み）	（訳）
わぬや　中城	ワンヤ３　ナカグスィク５	私は　中城
若松ど　やゆる	ワカマツィドゥ５　ヤユル３	若松で　ある
みやだいりごと　あてど	メデイグトゥ５　アティドゥ３	ご奉公ごとが　あって
首里に　上る	シュイニ３　ヌブル３	首里に　上るところです
廿日夜の　暗さ	ファツィカユヌ５　クラサ３	二十日夜の　暗さで
行先や　迷て	イクサチヤ５　マユティ３	行く先に　迷って
ことに　山路の	クトゥニ３　ヤマミチヌ５	殊に　山道の
露も　しげさ	ツィユン３　シィジィサ３	露も　繁く

右の唱えの琉球文も、和語の琉球語化を基本にしている。ちなみに、ヤユルは「〜ある」。「みやだいり」はメデイと読み、「ご奉公」の意。「あてど」はアティドゥと読み、「〜あって」の意。

⑶ 琉球文を基にした古典芸能の教育

琉球文は、和語を基本にして琉球語を組み入れたものであるが、そのような表記が可能となるのは、和語と琉球語が姉妹語の関係だからである。見方を変えるならば、和文から派生したのが琉球文であり、琉球文と和文は姉妹文で

ある。つまり、琉球文は和文（古文）と同じく、日本の貴重な言語文化遺産であり、琉歌集や組踊本は古典として全国レベルで学ぶべきものと考える。また、それに加え、琉球古典音楽及び沖縄民謡を音楽の教科書で学び、更には琉球芸能の所作（身体動作）を体育の授業に取り入れることも琉球の伝統文化継承のためには重要であると考える。

ちなみに、〈話し言葉〉によるシマ言葉の普及については、各地域で独自に行うほうが妥当であると考える。というのは、シマ言葉は語彙が少なく、論理的に話すことが不向きな情緒的な言葉であり、知識や理論を学ぶ学校教育には馴染まないと考えるからである。また、地域によっては、戦後の開拓集落や県外移住者の多い集落があり、シマ言葉の継承意欲に濃淡があるのは事実である。よって、〈話し言葉〉のシマ言葉を学校教育で一律に学ぶことは難しいと思われる。